

富山市 富山城跡 発掘調査概要

— 西町・総曲輪地区市街地再開発事業に伴う近世富山城下町発掘調査概要 —

2005

富山市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、富山市西町・総曲輪地内に所在する近世富山城下町の発掘調査概要である。
- 2 調査は、西町・総曲輪地区市街地再開発事業に伴うもので、発掘調査は西町・総曲輪地区市街地再開発組合の工事を受注した前建設工業・日本海建興共同企業体の現物提供を受けて、富山市教育委員会が実施した。調査地は、平成17年4月にオープン予定の「グランドパーキング（愛称CUBY）」の北東隅、総曲輪通りとみどり通りの交差点付近に位置する。
- 3 調査期間　現地調査　試掘確認調査　平成16年3月19日～3月29日（延べ3日間）
　　　　　　発掘調査　平成16年4月1日～4月12日（延べ8日間）
出土品整理　平成16年5月6日～平成17年2月28日
- 4 調査担当者　富山市教育委員会　埋蔵文化財センター　学芸員　小黒智久
　　　　　　　同　　　　　　　嘱託　安達志津
　　　　　　　同　　　　　　　嘱託　稻垣裕二
- 5 現地調査・出土品整理にあたり、富山市郷土博物館、富山市都市整備課、西町・総曲輪地区市街地再開発組合、浦畠奈津子氏、大橋康二氏、藤田邦雄氏、宮田進一氏（50音順）からご協力・ご教示を得た。特に、関連絵図・史料については浦畠氏から、出土品については宮田氏から多大なご教示を得た。記して、謝意を表します。
- 6 遺構略号は、井戸：SE、土坑：SK、溝：SD、ピット：Pである。
- 7 出土品整理および本書の執筆・編集は、富山市教育委員会埋蔵文化財センター職員の協力を得て、小黒・安達・稻垣が行った。文責は各項目の末尾に示した。
- 8 本調査にかかる図面・写真・出土品は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターで保管している。

目　　次

I　遺跡の位置と環境	1	IV　まとめ	10
II　調査に至る経緯と経過	1	写真図版	13
III　調査の概要	2	報告書抄録		



戦国後期～江戸前期における河川流路復元と城館配置図（1：50,000）

下図は大日本帝国陸地測量部明治43年測図（1：20,000）富山・奥羽村より

I 遺跡の位置と環境

富山城跡は富市中心部にあり、松川と黒川の合流点の西方約500m、標高約10mの自然堤防上に立地する。越中守護代神保長職により築かれ、築城年代は天文12（1543）年説（久保1983）が有力である。天正6（1578）年に神保長住が入り、その後佐々成政が居城した。中世富山城の位置論争が長く続いた（註）が、平成14（2002）年度から実施された富山城址公園内の試掘確認調査で確認された神保氏の築城時期（16世紀前半～中頃）の遺構が、その性格から中世富山城に属すると考えられたことで、位置論争に終止符が打たれた。天正13年に佐々成政を降した豊臣秀吉によって城は破却され、中世富山城は終焉する。

近世富山城は、慶長10（1605）年に前田利長によって築城されたが、慶長14（1609）年の大火で灰燼に帰した。その後、寛文元（1661）年以降に初代富山藩主前田利次によって修築された。絵図や記録から、前田利長が建設した富山城下町は、富山藩再建後の富山城下町より規模が大きかったことがわかる（深井1995）。

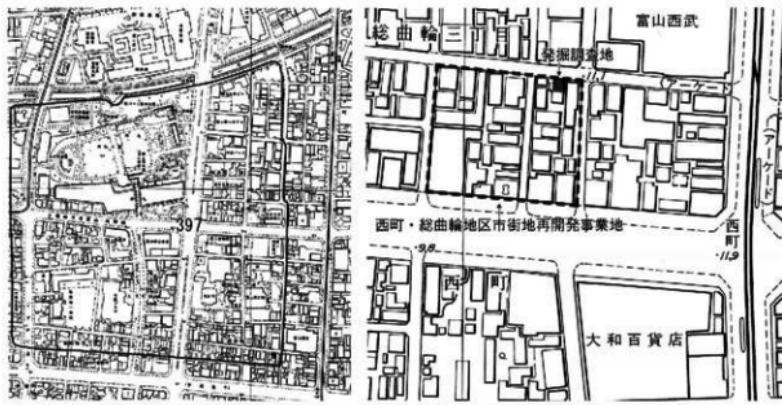
富山城は、北陸街道・飛騨街道の交わる神通川右岸という水陸交通の要衝の地に位置する。城の東方を流れる黒川は、富山市辰巳町2丁目以北では南北方向に流れ、以後、神通川に至る木町付近までは南北・東西方向を示すことから、辰巳町以北が江戸時代またはそれ以前に、町屋形成あるいは城下町整備に組み込まれたと推定されている（富山市教育委員会2004）。

今回の発掘調査地は、富山城の南東の外堀沿いの地域にある。『越中国富山古城之図』正保4（1647）年では町屋敷、「万治年間富山旧市街図」（1658-1661年）・「寛文六年十月御調理富山絵図」（1666年）では中級藩士岩田宇兵衛屋敷、「富山城下絵図」天保2（1831）年・「越中富山御城下絵図」安政元（1854）年では御郡役所に該当する。（小黒）

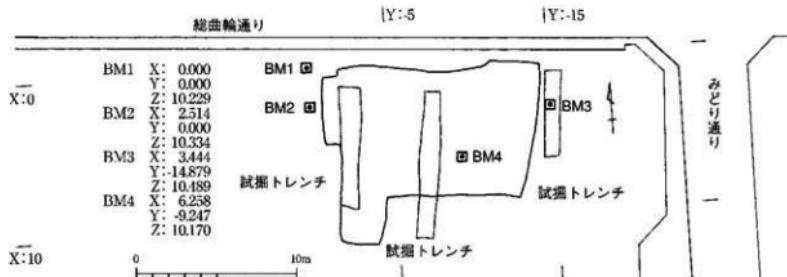
（註）江戸時代の加賀藩士富田景周に始まる近世富山城説や星井町説（久保1980）がある。富田景周『越登賀三州志』は越中・能登・加賀の古城跡を記した『故墟考』等6編からなり、今なお基礎史料としての価値は高い。

II 調査に至る経緯と経過

平成11年9月に富山市が策定した「中心市街地活性化基本計画」に基づき、平成13年4月に西町・総曲輪地区で市街地再開発事業の計画決定がなされた。平成14年11月に西町・総曲輪地区市街地再開発組合が設立された。計画された再開発ビルは地上8階建て、延べ床面積約23,545m²で、駐車場が主体となる。事業計画地（敷地面積4,499.56m²）の北側部分には、周知の埋蔵文化財包蔵地である富山城跡（市遺跡番号397）が所在する。富山市教育委員会では、平成15年4月から再開発事業の主管課



第1図 富山城跡の範囲（1:10,000）と発掘調査地（1:2,500）



第2図 発掘調査・試掘トレンチ詳細位置図

である市都市整備課と協議を重ね、既設建物の解体・基礎除去が行われた時点で、埋蔵文化財の有無を確認するため試掘確認調査を実施し、以後の取り扱いを決定することで合意した。

平成16年2月から工事が着手され、事業計画地の北半部2,250m²を対象に同年3月19日～3月29日まで延べ3日にわたり試掘確認調査を実施した。その結果、木造建物があった計画地の北東隅130m²の範囲に、現地表下40～90cmで埋蔵文化財の所在を確認した。江戸時代の井戸や土坑が密集しており、絵図との対比の結果、当該地は近世富山城下町の一部と判断された。現代の地下式建物があつた部分にも本来的には存在していたものと推定されるが、戦災等により破壊されたと考えられる。

試掘確認調査の結果をもとに市都市整備課および再開発組合・共同企業体など関係機関で協議を行い、確認された130m²の範囲について発掘調査を行うことで合意し、調査を平成16年4月1日～4月12日まで実施した。
(小黒)

III 調査の概要

(1) 調査の方法

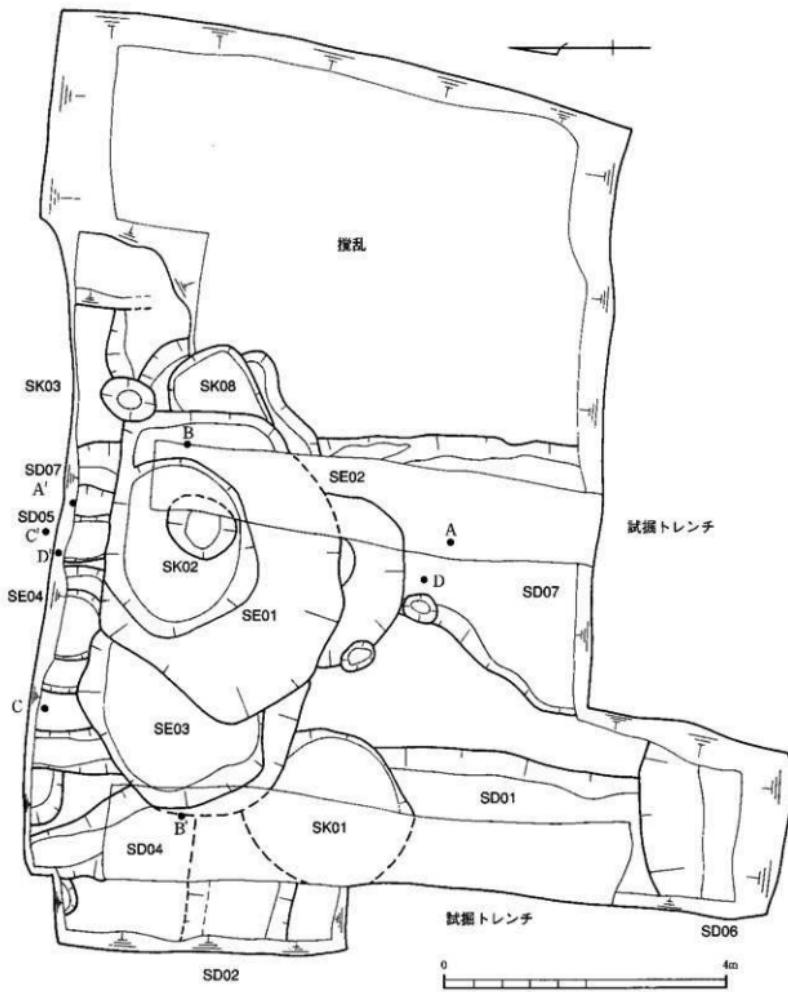
既設建物や工事の整地土（厚さ40～50cm）を除去した後、遺構検出作業を行った。遺物包含層はなく、整地土や建物による搅乱直下に遺構面がみられた。遺構概略図を作成して、人力で遺構の発掘を行った。測量に際しては、4点の基準杭を任意に設定し、光波測距儀を用いて局地座標系による測量を行った。標高については、共同企業体が設置した工事用基準杭から移動させて使用した。

(2) 検出遺構の概要

検出した主な遺構には井戸・土坑・溝・ピットがある。古代・中世・近世前期のものが混在し、重複している。
(小黒)

井戸 SE01 直径南北3.4m、東西4.4m、深さは1.9mである。SE02・SE03上層部・SE04・SK08より新しく、SK02・SK03よりは古い。断面観察から、廃絶後に井戸側は取り去られ、その後は廃棄土坑として利用されたことがわかる。井戸側や掘り方はわずかに残存している。標高8.6m付近で平面的に確認できた井戸側は約1.2×1.0mの方形プランを呈する。廃棄土坑の上層は白色砂質シルトで、炭化物を多く含む間層を挟み、下層は灰色系の土が堆積する。廃棄土坑から須恵器・土師器・珠洲・青磁・瓦質土器・越前・伊万里・越中瀬戸・唐津・近世土師器・青花・キセル・刀子・鉄製品・水引・陶器皿の高台を転用した紅入れ・漆漉し布が、井戸側からは越中瀬戸・近世土師器・唐津・漆塗木製品・焼壁土がそれぞれ出土した。

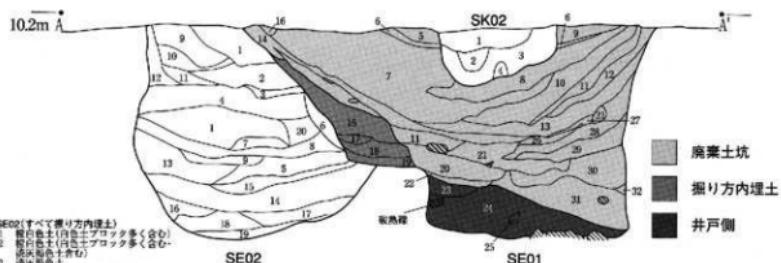
SE02 結物桶積上げ井戸で、SE01よりも古い。井戸側は直径0.65～0.85m、深さは2.95m、掘り方は東西2.5m、南北は約2.25mと推定される。井戸側は底面まで調査できたが、掘り方の最下部は上部の壁面が崩落する危険があったため、未調査である。水溜桶は高さ5～15cm程度が遺存し、上部は腐食していた。井戸側壁面には桶の縁の痕跡が残る。井戸側内覆土はしまりのない暗褐色灰土、掘り方内埋土は白色土ブロックを多く含む黄色／橙色土である。井戸側内から須恵器・越中瀬戸・唐津・備



第3図 遺構全体図

前・青花・瀬戸美濃が、掘り方内からは、弥生土器、須恵器、上師器、中・近世土師器、越前、備前、青花、越中瀬戸、磨石?がそれぞれ出土した。
(安達)

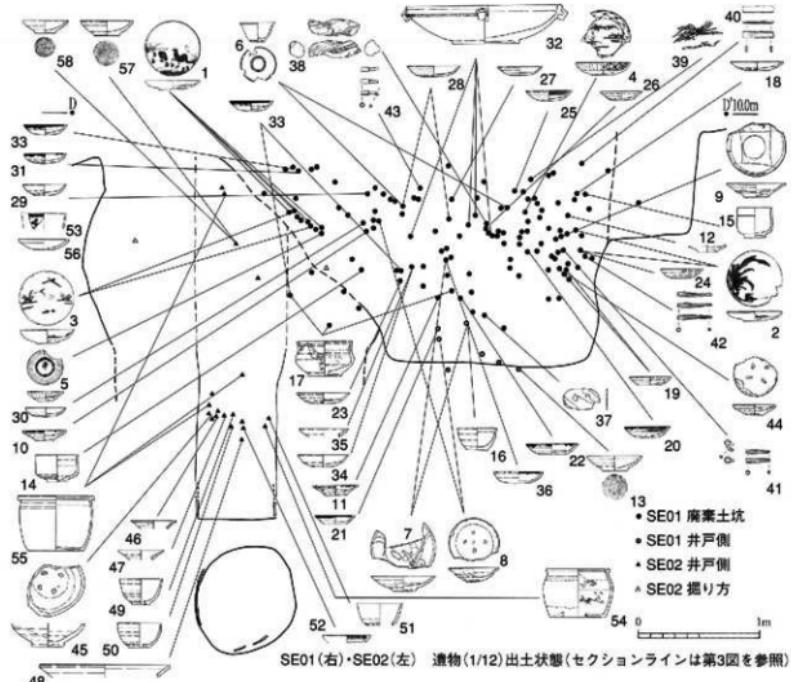
SE03 SE02・SD01より新しい。正確な規模は不明だが、掘り方は直径約4m、深さは約1.5mと推定される。検出当初は規模や形状から、井戸と想定して調査を進めたが、土層断面観察の結果、上層部(新段階)、下層部(古段階)の複数の遺構にわかれることが判明した。下層部は上層部に覆いつくされており、検出面上では確認できない。上層部は深さ約0.6mで、井戸とは考えにくく、廃棄土坑と



SE01 (右)・SE02 (左) 遺物(1/12)出土状態 (セクションラインは第3図を参照)

SE01
 1 滅失
 2 滅失
 3 滅失
 4 滅失
 5 滅失
 6 滅失
 7 滅失
 8 滅失
 9 滅失
 10 滅失
 11 滅失
 12 滅失
 13 滅失
 14 滅失
 15 滅失
 16 滅失
 17 滅失
 18 滅失
 19 滅失
 20 滅失
 21 滅失
 22 滅失
 23 滅失
 24 滅失
 25 滅失
 26 滅失
 27 滅失
 28 滅失
 29 滅失
 30 滅失
 31 滅失
 32 滅失
 33 滅失
 34 滅失
 35 滅失
 36 滅失
 37 滅失
 38 滅失
 39 滅失
 40 滅失
 41 滅失
 42 滅失
 43 滅失
 44 滅失
 45 滅失
 46 滅失
 47 滅失
 48 滅失
 49 滅失
 50 滅失
 51 滅失
 52 滅失
 53 滅失
 54 滅失

SK02
 1 滅失
 2 滅失
 3 滅失
 4 滅失
 5 滅失
 6 滅失
 7 滅失
 8 滅失
 9 滅失
 10 滅失
 11 滅失
 12 滅失
 13 滅失
 14 滅失
 15 滟失
 16 滟失
 17 滟失
 18 滟失
 19 滟失
 20 滟失
 21 滟失
 22 滟失
 23 滟失
 24 滟失
 25 滟失
 26 滟失
 27 滟失
 28 滟失
 29 滟失
 30 滟失
 31 滟失
 32 滟失
 33 滟失
 34 滟失
 35 滟失
 36 滟失
 37 滟失
 38 滟失
 39 滟失
 40 滟失
 41 滟失
 42 滟失
 43 滟失
 44 滟失
 45 滟失
 46 滟失
 47 滟失
 48 滟失
 49 滟失
 50 滟失
 51 滟失
 52 滟失
 53 滟失
 54 滟失



第4図 SE01・02 セクションと遺物出土状態 (遺物番号は第6・7図と同じ)

思われる。下層部は底面がSE01より15cm程度高いものの、壁面に他の井戸と同様のほぼ垂直な掘り込み部分がみられることから、井戸であった可能性を否定することはできない。ただ、遺存状態が悪いこともある、明確に井戸側と判断できる状況にはなかった。SE03下層部に重なって、SE04が構築されており、さらにSE04廃絶後に掘られた廃棄土坑がSE03上層部である。上層部の覆土から須恵器・珠洲・中世土師器・越中瀬戸・伊万里・唐津・瀬戸美濃・青白磁染付・織部・砥石・漆膜・鉄滓・瓦・骨・炭が、下層部からは須恵器・珠洲・中世土師器・瀬戸美濃・伊万里・唐津・越中瀬戸がそれぞれ出土している。

(縦柱)

SE04 掘り方は東西1.8m、井戸幅は直径1.0mで円形を呈する。深さ2.5mまで調査したが、調査区壁面・工事用足場の崩落を避けるため、それ以下の掘削は断念した。SE01廃棄土坑・SE03上層部より古く、SD05・SK10よりは新しい。井戸側内からは瀬戸美濃・青磁・伊万里・唐津・越中瀬戸・近世土師器が、掘り方内埋土からは須恵器・珠洲・唐津・越中瀬戸がそれぞれ出土している。(安達)

土坑 SK01 直径約2.3m、深さ約0.6mの円形土坑であり、土層観察から廃棄土坑と推定される。SD01・02よりは新しく、SE03上層部よりは古い。覆土からは瀬戸美濃・白磁・青白磁・中~近世土師器・越前・伊万里・唐津・越中瀬戸・炭・鉄製品が出土している。

溝 SD06 SD01に直交する幅2m程度の溝と思われる。SD01よりは新しい。覆土からは土師器・珠洲・近世土師器が出土している。

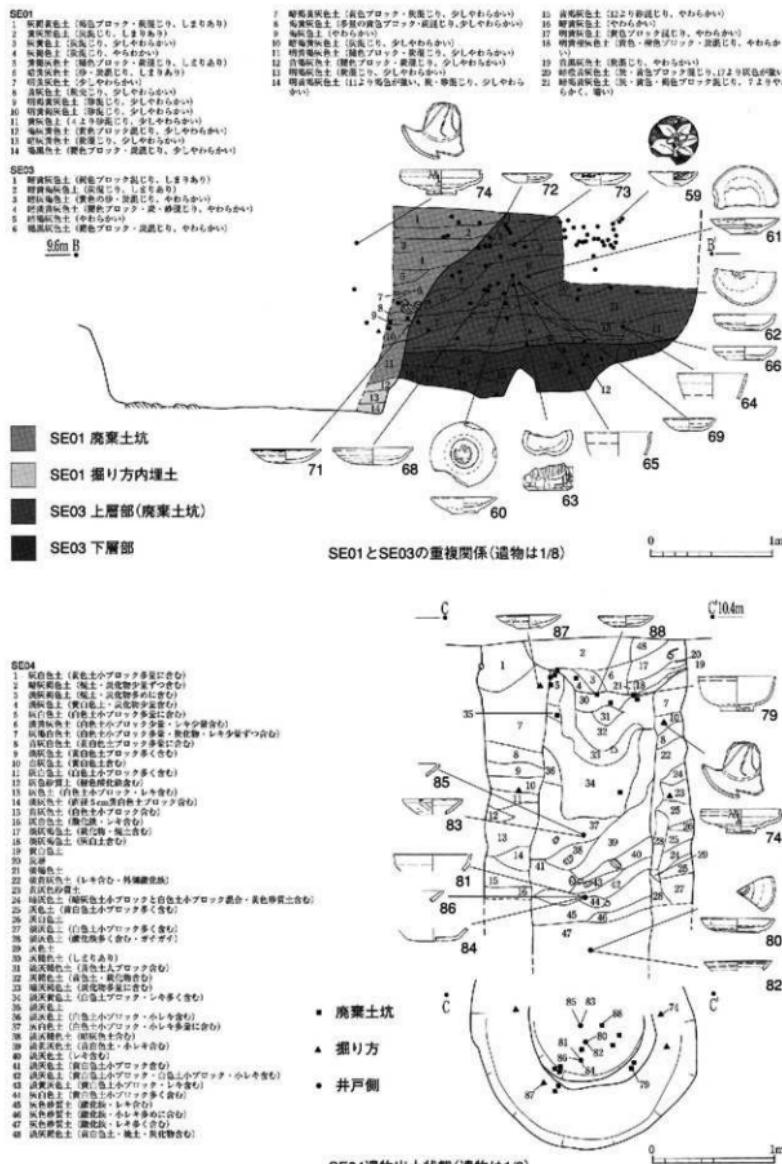
(3) 出土遺物の概要(第6~8図)

SE01 1~6は伊万里。1~3は草鳥文、4は植物文、5は「壽」銘のある菊皿、6は小杯。7・8は唐津灰釉皿。7は絵唐津で、見込み蛇ノ目釉剥ぎ後に砂目積みで、高台付近にも砂目痕跡が残る。SE03出土破片とも接合した。8は胎土目積み折線皿。9~12は越中瀬戸。9は灰釉・鉄釉かけわけ丸皿で、鉄釉を先にかけている。内面には直接焼痕跡がある。10・11は灰釉丸皿(灯明皿)、12は鉄釉丸皿。いずれも体部下半はロクロ削りで、高台を削り出す。10・11の内面には、釉止めの段がある。13は近世土師器皿。ロクロ成形で、強くナデられている。回転糸切りにより切り離されている。14・15は越中瀬戸鉄釉丸皿。高台部分は露胎である。15は内底面の釉を同心円状に拭い取り、SE03出土破片とも接合した。16は越中瀬戸鉄釉小杯で、回転糸切りにより切り離されている。17は越中瀬戸鉄釉火入れ。削り出し高台で、高台付近は露胎である。内面も口縁部を除いて露胎で、懸垂孔が穿たれている。

18~31・33は越中瀬戸素焼皿。回転ナデ成形後、回転糸切りによりロクロから切り離した後、裏返して回転ヘラ削りで糸切り痕を消している。ロクロは時計回りで、ヘラを入れる位置で大きく4大別できる。底面から器高の1/2まで回転ヘラ削りを行うもの(18・23・29~31・33)、1/3まで行うもの(24・27)、1/4まで行うもの(20~22・26・28)、底面のみ行うもの(19・25)である。29は底面の回転ヘラ削り痕を静止ヘラ削りにより再調整している。19~22・31・33は灯明皿。32は越中瀬戸鉄釉人盤で、SE03出土破片とも接合した。内面には灰釉により「X」字状の装飾が施されている。口縁部下に刺穴装飾のある突帯をめぐらせた後、把手を設けている。34~36は近世土師器皿。34はロクロ成形、35・36(灯明皿)は非ロクロ成形である。34は回転糸切り後に、静止ヘラ削りで再調整している。

37は漆塗木製品。用途不明で、漆膜付近が遺存していた。わずかに遺存していた木片は針葉樹と同定された。38は漆漉し布。半織りの布で、絞った状態のまま、漆が付着した部分のみ遺存していた。顕微鏡観察の結果、細かな気泡を多数含む漆が十分に浸透している様子が確認された。39は植物織維を燃てて断面円形の紐状にした水引。顕微鏡観察の結果、朱を混和した淡褐色の膠着剤が織維の間までよく浸透している様子が観察された。40は刃子の茎部である。鉄地銅張の柄に差し込んでいる。X線写真観察の結果、明確な目釘孔は認められない。41~43は銅製キセルである。

7・8・13・16・21は井戸底面付近から出土しており、一括資料として捉えられる。13・21は類例が少なく、年代的位置づけが難しいが、8・16が参考になる。生産地での纏年に基づくと、8は大橋編年(大橋1989)ではI期に、16は宮田編年(宮田1997)ではI期に位置づけられる。なお、図示していないが、8・16・21とほぼ同じ高さから大橋編年II-2期の初期伊万里(染付)が出土したことや、北陸の17世紀前半代には唐津皿に胎土目積みと砂目積みの両方がみられる(藤田1996)ことから、井戸側は17世紀第II四半世紀に埋没が始まったと推定できる。



第5図 SE01・03・04 セクションと遺物出土状態（遺物番号は第6～8図と同じ）

廃棄土坑は、肥前陶磁が大橋編年II-2期に、越中瀬戸が宮田編年II期に位置づけられることから、17世紀第II四半世紀という年代観が得られる。近世土師器の位置づけは困難だが、金沢城跡石川門前土橋の盛土3出土土器（石川県立埋蔵文化財センター1997・1998）に類似すると捉えれば、17世紀第II四半世紀を中心とした年代が与えられ、肥前陶磁・越中瀬戸の年代観とも矛盾しない。ただ、重複関係から確実にSE01より先行するSE03上層部の年代が17世紀第II四半世紀→後半代と考えられる以上、廃棄土坑出土資料の示す年代観は造構の年代を直接的に示すものではないことになる。また、図示していない肥前陶磁のなかには大橋編年III期に下るものもあるので、廃棄土坑は17世紀後半代にかけて埋没したことになる。

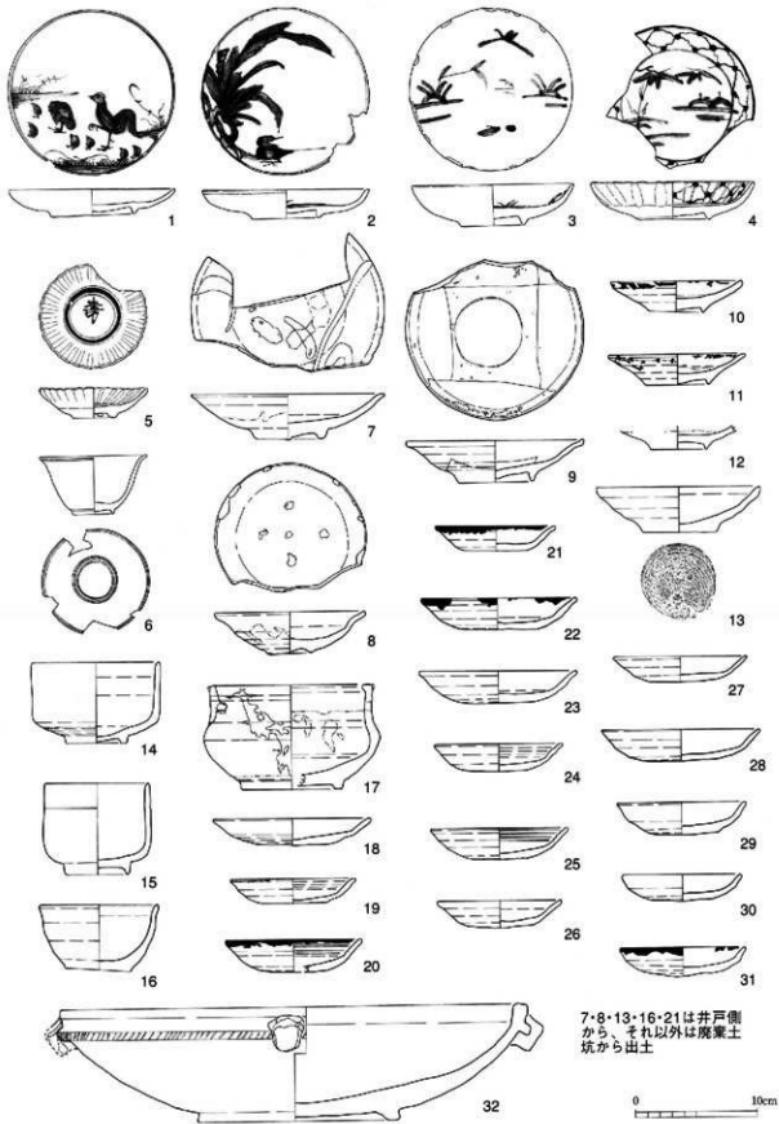
SE02 53が掘り方内埋土、その他は井戸側内覆土から出土した。44~48は唐津。44は絵唐津胎土目積み灰釉皿で、体部下半は露胎でロクロから回転糸切りで切り離した後、高台を削り出している。45は胎土目積み灰釉碗である。高台付近は露胎で、疊付部分は磨耗が著しい。46は灰釉潔縁皿、47は灰釉皿、48は灰釉中皿。49・50は越中瀬戸。49は鉄釉碗で、SE03出土破片とも接合した。50は鉄釉天目。51は中国製碗。52・53は青花。54・55は唐津で、掘り方・井戸側内の破片が接合した。54は叩き成形で、内面の当て具は同心円状である。当て具文様は同心円状から格子目状へと寛永期（1624~1643年）頃に漸次変わったとみられる（大橋1989）ので、占い様相といえる。55は底面が正円形、口縁部は橢円形である。56~58は近世土師器皿。56が非ロクロ成形、57・58はロクロ成形である。56は口唇部のみナデている。57はSE01出土資料（第6図13）とほぼ同形同大で、58も同形の小型品と捉えられる。

古い様相を留めた44・46もあるが、全体として唐津は大橋編年II期に、越中瀬戸も宮田編年II期に比定できる。青花もこれらの年代と大きく矛盾しないものと思われる。近世土師器もSE01出土資料と類似し、同時期と思われる。また、図示していないが、備前指鉢（写真図版4）も出土している。岡山城編年（岡山市教育委員会2002）では近世1b期に相当し、16世紀末前後の年代が与えられる。以上から、SE02は17世紀前半代に構築・利用され、使用停止後は比較的短期間のうちに埋められたと推定できる。

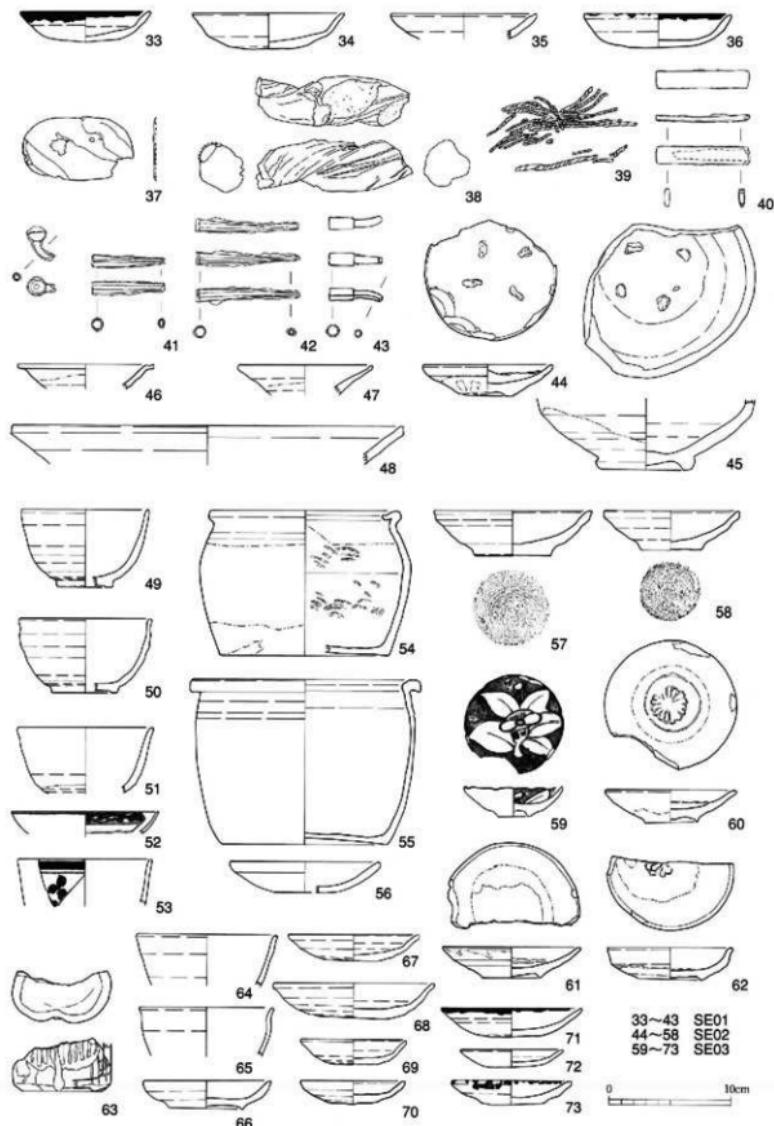
SE03 59は伊万里染付花文菊皿。60~62は越中瀬戸。60・61は灰釉丸皿で、いずれも削り出し高台である。60の内面には釉止めの段があり、菊花文が押印され、直接重焼痕跡が残る。61は火を受けた痕跡がある。62は灰釉向付で、内面には菊花文が押印される。体部下半はロクロ削りを施し、高台削り出す。63は織部向付。64は鉄釉丸碗、65は鉄釉天目。66は瀬戸美濃の綠釉内禿皿。67~72は越中瀬戸素焼皿。ロクロから切り離した後、71は底面から器高の1/2まで、それ以外は1/4までそれぞれ回転ヘラ削りを行い、糸切り痕を消す。いずれもロクロは時計回りで、形態や製作技法はSE01出土資料に酷似し、同時期と捉えられる。68・71は灯明皿。73は近世土師器皿（灯明皿）で、ロクロ成形である。糸切り後、静止ヘラ削りで再調整している。74・75は唐津。74は絵唐津灰釉縁立皿で、高台は露胎である。SE04掘り方内埋土出土破片と接合した。75は灰釉中皿で、外面体部下半および高台は露胎である。削り出し高台で、砂目積みである。76・77は伊万里碗で、76には吉祥文字「福」の裏銘が、77には「太明」の裏銘がある。

59~76は上層部出土資料、77は下層部出土資料である。63（17世紀初頭）や66（16世紀後半代）、74（17世紀初頭）など一部に古い年代を示す資料もあるが、76は大橋編年II-2期と捉えられ、他の資料も17世紀前半代で捉えられる。図示していないが、上層部出土資料のなかには藁灰釉の大橋編年I期の唐津片や同皿期の伊万里片ものもあり、新旧の遺物を含みつつ、17世紀後半代にかけて埋没したと推定できる。図示していないが、下層部出土資料には伊万里赤絵小坏を含む。樂付も概ね大橋編年II-2期からIII期への移行期と考えられる。以上から、下層部はおよそ1650~60年代にかけて埋没し、その後上層部の掘削・埋没も17世紀後半代にかけてのものと推定される。

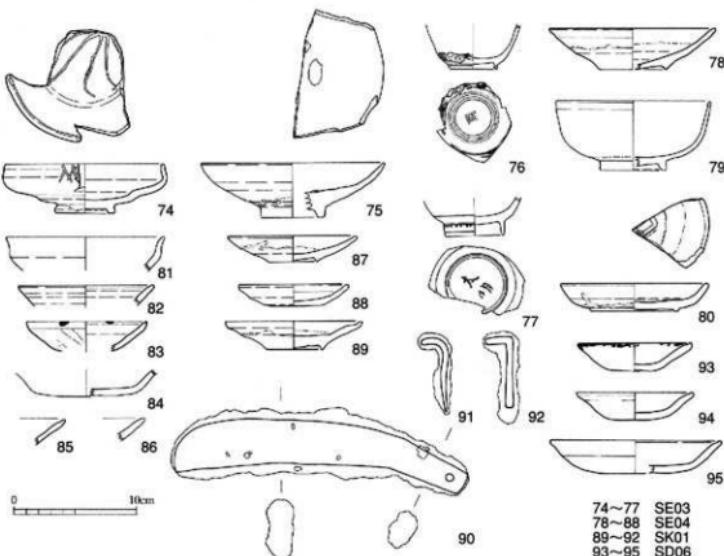
SE04 78とSE03上層部出土破片と接合した74が掘り方内埋土から出土し、他は井戸側内から出土した。78~80・82は越中瀬戸。78は鉄釉丸皿。体部下半はロクロ削りで、高台を削り出す。内面には釉止めの段があり、体部下半および高台は露胎。79は灰釉丸碗で、高台付近は露胎。80は灰釉丸皿で、体部下半および高台は露胎。内面には詳細不明ながら押印文や直接重焼痕跡がある。山下窯製品の可能性がある。82は素焼皿。81は瀬戸美濃鉄釉天目。83~86は近世土師器皿で、いずれも非ロクロ成形である。



第6図 SE01 出土土器・陶磁器



第7図 SE01・02・03 出土土器、陶磁器、鉄・銅製品（鉄・銅製品はX線写真で補正済）



第8図 SE03・04, SK01, SD06 出土土器・陶磁器、鉄製品(鉄製品はX線写真で補正済)

78は宮田編年Ⅱ期に比定され、図示していない破片には17世紀前半代の灰釉唐津片がある。若干古い年代観を示す74もあるが、重複関係からSE03古段階より確実に後出するので、井戸の構築時期は1650~60年代以降となる。井戸側内出土資料は、若干古い年代観を示す80・81もあるが、近世土師器の様相も考慮するなら、17世紀半ば頃には埋没がある程度進んでいたことになる。井戸側埋没後、井戸側に沿って掘りさらえられて59層以上の部分が堆積した。掘りさらえ覆土上部から出土した79は17世紀後半代であり、その頃に埋没した後、再度廃棄土坑が掘削されている。87は越中瀬戸灰釉丸皿、88は廃棄土坑出土越中瀬戸素焼皿。88の形態・製作技法はSE01・03出土資料と同様で、底面から器高の1/4まで回転ヘラ削りしている。

SK01 89は越中瀬戸鉄釉折縁丸皿。体部下半および高台は露胎で、内面には直接重焼痕跡が残る。体部下半はクロ口削りを施し、削り出し高台である。90は目釘孔を1つもつ鉄鎌。91・92は角釘。図示していない遺物の年代観があわせ、埋没時期を17世紀半ば頃と考える。

SD06 93~95は近世土師器皿。非クロ口成形で、いずれも口唇部を摘み上げるようにナデしている。93は灯明皿。SE04出土資料に類似し、同時期と捉えられる。

IV まとめ

(1) 遺構の形成年代

検出遺構は伊万里の有無を基準にすると新旧2時期に形成されたことがわかる。出土遺物から、SD05は11世紀代に遡る。SD05と重複するSD07は、古代の遺物を含みつつも、中世の遺物が主体で、大橋編年Ⅰ期の唐津皿片が1点含まれる。17世紀第Ⅰ四半世紀を下限とした中世遺構の可能性が高い。

古段階 SE01井戸側・SE02がある。概ね17世紀前半で捉えられるが、年代を前半代のどの位置に求めるかが問題となる。北陸では17世紀初頭に胎土日積み唐津の流通が始まり、17世紀第Ⅱ四半世紀以降に初期伊万里が食器組成に新たに加わる（藤田1996）。SE01井戸側からは伊万里が出土してい

ない。SE02は掘り方最下部が未掘だが、大部分は調査している。井戸側内からは伊万里が出土していないことから、SE02も伊万里の出現以前と考える。SD01・SD06からも伊万里は出土していないことから、古段階に属すると考えられる。

大坂城下では1620年代の中・後期頃に初期伊万里が出現し（積山1996）、金沢城では遅くとも寛永期（1624～1643年）頃には普及していた可能性が指摘されている（石川県立埋蔵文化財センター1997、以下、「石川埋文」と略す）。今回の調査で出土した近世土師器は、全体的な形状や口唇部を摘み上げる特徴などが金沢城跡石川門前土橋の盛土3出土土師器に類似する。盛土3からは個体差の少ない大量の土師器皿が出土し、盛土に伴う地鎮的祭祀用に大量同時生産されたと解釈されている。伴出陶磁器や江戸町出土資料との対比、寛永8（1631）年の大火、寛文8（1668）年の『金沢城図』との対比から盛土3を含む土橋の築成年代を、1622年を上限、1668年を下限とした1630～1640年頃と推定している（石川埋文前掲）。

以上を参考にすると、古段階の遺構群は17世紀第Ⅱ四半世紀頃となる。さらに伊万里が初期伊万里の最終段階（大橋編年Ⅱ-2期）であることから、1630～50年代が与えられる。富山藩は寛永16（1639）年に成立したが、当初は百塚築城のための仮城下として加賀藩より富山町（註1）を借用していたことから、富山町における初期伊万里出現以前である古段階の遺構群は1640年～50年代と推定できる。重複関係から古い順に示すと、SE02→SE01井戸側となる。SD01はSE02に、SD06はSE01井戸側にそれぞれ伴う地割溝であった可能性もある。

絵図との対比 発掘調査地は、正保4（1647）年の『越中国富山古城之図』での町屋敷に該当する。同絵図は、富山藩が加賀藩から富山町を借りてからしばらくたった正保4年から、富山藩が富山町を建設し直す寛文元（1661）年以前の富山町を描いたものである（深井1992）。古段階の遺構群の年代は、絵図の年代とも矛盾せず、先の推定年代の蓋然性は高まる。町屋敷の具体的な内容に迫るのは難しいが、出土品には絵唐津を含む唐津・備前・青花などもあり、商家等の富裕層の可能性もある。

新段階 SD04、SE03下層部・上層部、SE04、SK01～03・08・12がある。SD01・SE03下層部・SE04は、重複関係から新段階の遺構群のなかでも古い段階と考えられ、富山町での初期伊万里出現後に相当する。出土遺物からはSE04がSE03下層部より古棺を呈するが、重複関係からはSE04が確実に後にする。SE04の調査は底面まで到っていないが、未掘部分にSE03下層部とほぼ同時期かそれ以降の遺物が埋没していると考える。図示していないものの、重複関係からSE03下層部に先行するSD04からは、大橋編年Ⅱ-2期の伊万里染付皿や官田編年Ⅱ期の越中瀬戸皿が出土している。

絵図・史料との対比 調査地は、『万治年間富山旧市街図』（1658-1661年、以下「万治絵図」と略す）・『寛文六年十月御調理富山絵図』（1666年）での岩田宇兵衛屋敷（以下、「岩田屋敷」と略す）にあたる（註2）。藩士岩田宇兵衛（寛文3年生まれ）は、貞享3（1686）年の『富山藩武鑑』や元禄3（1690）年の『正甫公御代分帳』に馬廻組150石とあり、富山藩では中級藩士にあたる。侍帳で元禄3年にも名を確認できることから、この時期までは屋敷が存続していたことがわかる。「万治絵図」や生年は出土品の年代観と矛盾しないので、SD01やSE03下層部・SD04は岩田屋敷に伴い、1663年以降1660年代のうちに形成されたと考えられる。その後、SK01・08・12が掘られた。SK08は他とは異なり長方形の箱形を呈するので、円形基調の廐棄土坑とは性格が異なると思われる。

その後さらに、SE03上層部、SE01廐棄土坑、SK02・03が掘られた。出土品から、17世紀後半代にかけて埋没したことがわかる。出土品は、SD04・SE03下層部・SE04よりも確実に新しいが、18世紀に下るものはないので、絵図や文字史料から得られる年代観と矛盾しない。これらの遺構も岩田屋敷に伴うと考える。18世紀に下る遺物が遺構に含まれないことから、岩田屋敷は1690年代に廐棄したと推定される。屋敷には肥前陶磁や織部などの高級陶磁器も含まれており、これらの入手方法の検討は今後の課題である。

遺構検出時には、17世紀代の遺物に混じって大橋編年V期（19世紀前半代）に下る伊万里なども出土した。御役所の時期の遺物であり、遺構自体は削平されているが、周辺に役所関連施設が存在したことを示唆する。また、明確な遺構は確認できなかったが、17世紀第Ⅱ四半世紀の遺物は富山藩成立以前の遺構に伴っていたと思われる。今回の調査では、発掘成果が絵図の変遷と整合することやそれに先立つ時期の遺構・遺物を確認できた。

（註1）富山町の文献上の初出は永享2（1430）年の京都二草院所蔵文書である。このなかに「越中國富山柳

町」とある。二尊院所蔵文書は室町期における富山町支配のその後の変遷を示す史料である。文献史学では、近世富山城下町のことを富山町と呼称して研究が進められてきた。ただ、室町期の富山城下町と近世の富山町が同じ範囲を指すのかは不明である。以下では、考古学の一般的呼称としての近世富山城下町ではなく、両有名詞としての富山町という用語を用いる。

(註2) 同絵図は深井甚三氏による資料批評(深井1992)を経ており、参考になる。なお、深井氏は、「万治絵図」は寛文3~6年の作成と考えている。

(2) 土器・陶器の様相

越中瀬戸素焼皿の評価 廃棄土坑を中心として、越中瀬戸素焼皿が多数出土した。このような素焼皿はこれまで確認されておらず、越中瀬戸のなかで初出資料となる。ここでは、國化した富山町出土資料を基に、越中瀬戸素焼皿の評価を行いたい。素焼皿は、大(口径13cm程度)・中(同10.5cm程度)・小(同8.5cm程度)の差はあるが、形態や基本的な製作技法は同様である。径高指数はいずれも20~25前後に収まり、底面のロクロ削りの施工範囲にわずかな差異が認められるだけである。以上から、素焼皿は同時に大量生産された特注品の可能性が高い。年代を示唆するのはSE01井戸側出土品である。遺構の年代が1640~50年代と考えられる以上、現時点では当該期の一括生産と考えておきたい。通有の越中瀬戸皿は大(口径14cm程度)・小(同11cm程度)に分かれるが、径高指数は20~25の幅に収まる。

非ロクロ成形の土師器皿は大(口径13cm程度)と小(同9.5cm程度)に分かれ、径高指数は20~25の幅に収まる。越中瀬戸素焼皿の大・中にほぼ合致する。報告されている資料を見る限り、金沢城跡石川門前土橋の盛土3出土上土師器皿(石川理文前掲)はすべて非ロクロ成形で、特大・大・中・小に4大別できる。大(口径13cm程度)が最も多いが、径高指数が15~22程度と幅がある。特大を除いて素焼皿の大・中・小のグループングに概ね合致する。

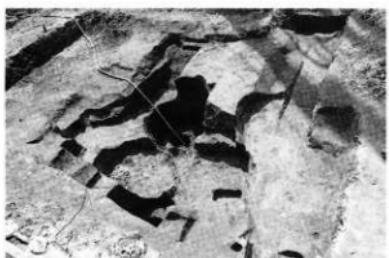
富山町出土土師器皿は、金沢城跡石川門前土橋盛土3出土上土師器皿と類似した形態的特徴をもつが、金沢城跡の皿大は器高がやや低い平べったい傾向がある。小差はあるものの、全体として両者は類似している。1640~50年代は富山藩が加賀藩から富山町を借用していた時期であることを考えれば、それは至極当然の結果とみることもできる。金沢城跡の大・中に相当する上土師器を富山町、あるいは周辺で生産するなかで、越中瀬戸工人が土師器皿を模倣し、越中瀬戸の製作技術で意図的に生産したもののが素焼皿と考えたい。わざわざ手間をかけて底部の糸切り痕を削りとり、丸みをもたせることがその証拠である。

ロクロ土師器の評価 SE01井戸側・廃棄土坑、SE02からは、糸切り痕を残すロクロ土師器が少量出土した。近世土師器のなかでは客体的存在である。SE01井戸側が一括資料と捉えられる以上、現時点では1640~50年代の資料と理解する。金沢城跡(石川理文前掲)ではロクロ土師器が報告されていないが、慶長12(1607)~慶長19(1614)年の新潟県上越市福島城跡(小島1997)や慶長19年に築かれた高田城跡(小島同上)など上越地域でロクロ土師器が多く認められる。高田城跡SX101出土品(17世紀第I四半世紀)中には富山町出土資料に類似するものがある。富山町出土資料がやや後出するが、加賀前田家に備えるために成立した高田藩(松平家)の居城出土品と類似する意味の追究は、今後の類例の増加を待って検討すべき課題である。

(小黒)

主要引用・参考文献

- 石川県立歴史文化財センター 1997・1998「金沢城跡石川門前土橋(通称石川門)発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ」
人間論 1989「肥前陶磁」ニュー・サイエンス社
岡山市教育委員会 2002「岡山城三之曲輪跡」吉原一丁目地区西側堀垒壁建設に伴う発掘調査」
久保尚文 1980「『富山』と『記』にみえる富山城」「日本城郭体系系」新潟・富山・石川」新入門往来社
久保尚文 1983「越中中世史の研究」寧町・戰国時代」杜雲房
小島吉雄 1997「高田城跡」・「高田城跡」「中・近世の北陸」杜雲房
坂井誠一 1974「富山城跡」巧美出版
植山 洋 1996「関西における肥前陶磁」「考古学ジャーナル」No.410 ニュー・サイエンス社
富山県図書館「越後富二三志」(石川県図書出版協会により1930年刊本一時。1977年に復刻)
富山市教育委員会 1999「富山城の歴史」
富山市教育委員会 2001「富山城跡発掘調査報告書」
深井甚三 1992「五世町下富山城の建設、再建と地城構造」「富山大学教育学部紀要」第10号
深井甚三 1995「『吉原に掘まれた富山城下』」「城下町古地図散歩1 全志・北陸の城下町」平凡社
藤井和雄 1996「北陸における肥前陶磁」「考古学ジャーナル」No.410 ニュー・サイエンス社
占谷明 2004「富山城跡発掘調査から」「田立柱跡物から礎石遺物」J・北陸中世考古学研究会
宮田逸一 1997「城下町の変遷と分布」「中・近世の北陸」杜雲房



完掘状態（北西から）



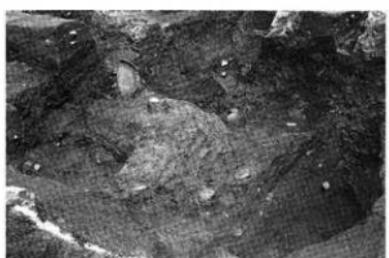
完掘状態（北東から）



SE01 完掘状態（北から）



SE01 挖り方底面遺物出土状態（東から）



SE01 廃棄土坑内遺物出土状態（北東から）



SE01・02, SK02 セクション（東から）



SE01 廃棄土坑・井戸側内遺物出土状態（東から）



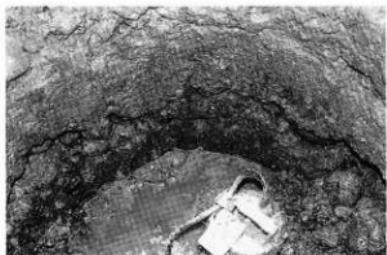
SE01 廃棄土坑内水引出土状態



SE01 廃棄土坑内遺物出土状態（北から）



SE02 完掘状態（北から）



SE02 水溜（結物桶）検出状態



SE02 井戸側（結物桶）縦痕跡



SE02 掘り方内埋土セクション（東から）



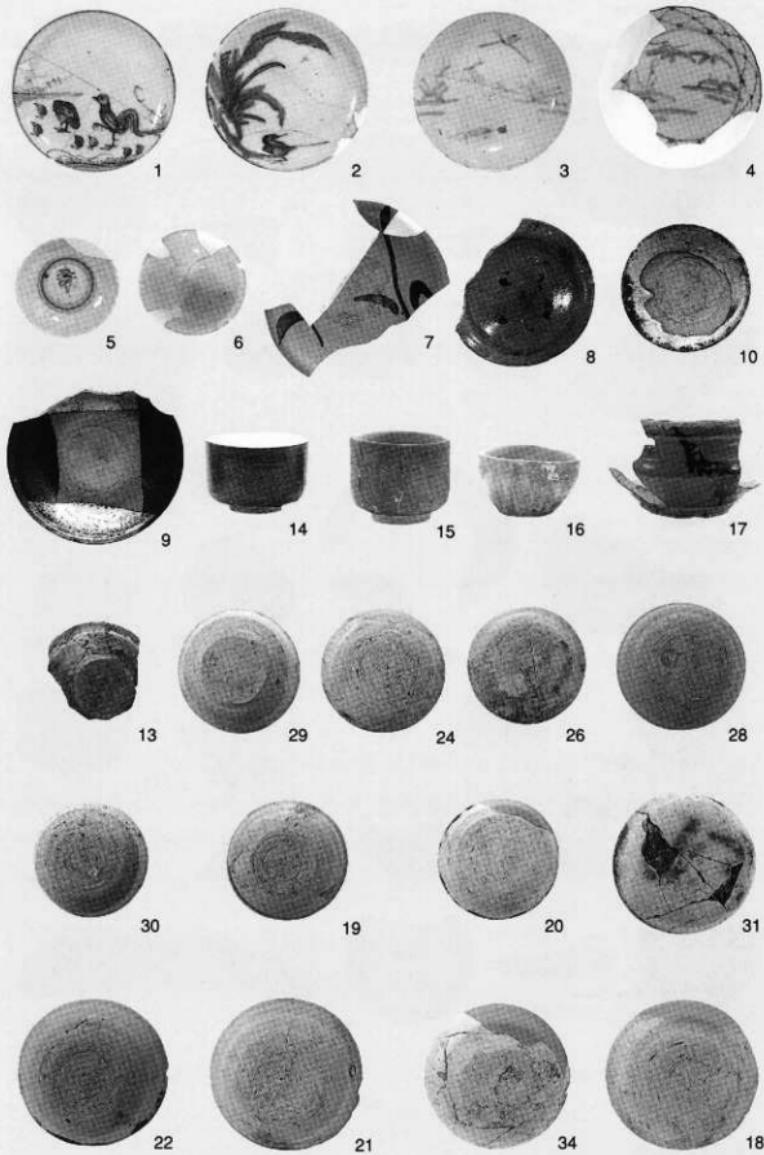
SE03 完掘（北から）



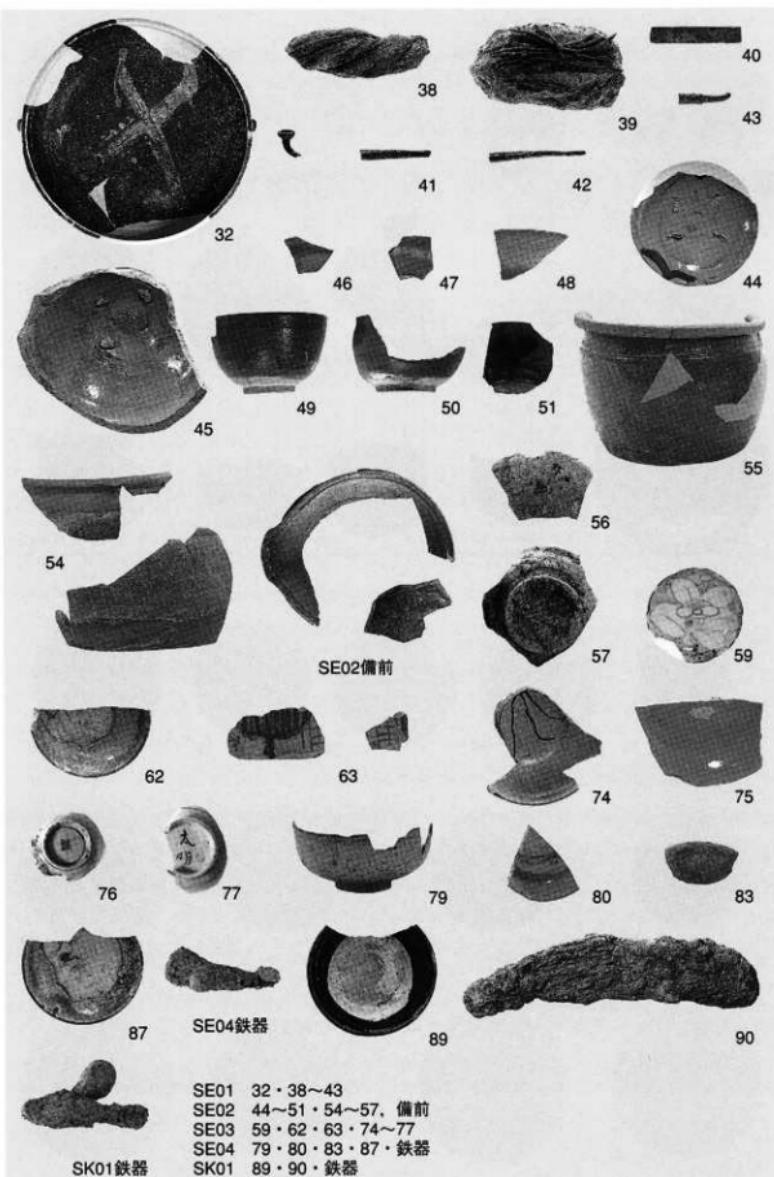
SE03 セクション（北から）



SE04 セクション（南から）



SE01 出土土器・陶磁器（約1/4、番号は第6・7図と同じ）



SE01~04, SK01 出土土器・陶磁器、鉄器 (32-SE02備前は約1/8、その他は約1/4、番号は第6~8図と同じ)

報告書抄録

ふりがな	とやまし とやまじょうあと はっくつちょうさがいよう						
書名	富山市 富山城跡 発掘調査概要						
副書名	西町・総曲輪地区市街地再開発事業に伴う近世富山城下町発掘調査概要						
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	139						
編著者名	小黒智久・安達志津・稻垣裕二						
編集機関	富山市教育委員会 埋蔵文化財センター						
所在地	〒930-0803 富山県富山市下新本町5番12号 TEL 076-442-4246						
発行年月日	西暦2005年2月28日						

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
富山城跡	富山市総曲輪 3-7-9	16201	397	36度 41分 23秒	137度 12分 53秒	20040401 ～ 20040412	130m ²	西町・総曲輪 地区市街地 再開発事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
富山城跡	城下町	江戸時代	井戸・土坑・溝・ ピット	弥生土器・土器器・須恵器・ 珠洲・瀬戸美濃・青磁・越前・ 織部・備前・近世土器器・伊 万里・唐津・中瀬戸・青花・ 五輪塔・キセル・刀子・鎌・ 釘・鏡・不明鉄製品・鉄滓・ 水引・漆膜・不明漆製品・布・ 結物桶・瓦・骨・赤色顔料			近世富山城の城下 町(町屋敷・中級 藩士屋敷)をはじ めて確認した。	
要約	<p>近世富山城下町域で初めて発掘調査が行われた。1640～50年代の井戸・溝と1663～1690年代の井戸・溝・廃棄土坑が確認された。前者は『越中国富山古城之図』正保4(1647)年での町屋敷に、後者は『万治年間富山旧市街図』(1658～1661年)・『寛文六年十月御調理富山絵図』(1666年)での中級藩士岩田宇兵衛屋敷にそれぞれ伴う遺構群と考えられる。</p> <p>町屋敷の遺構群からは、絵唐津を含む唐津や備前、青花などが出土しており、商家などの富裕層の屋敷であった可能性もある。馬廻程150石ものの岩田宇兵衛屋敷からは、肥前陶磁や織部などの高級陶磁器のほか、越中瀬戸も多量に出土した。この他、キセルや水引など当時の生活文化を伝える遺物も出土している。</p> <p>遺構はすでに削られていたが、『富山城下絵図』天保2(1831)年・『越中富山御城下絵図』安政元(1854)年にある御郡役所の時期の遺物も出土している。</p>							

富山市埋蔵文化財調査報告139

富山市 富山城跡 発掘調査概要

—西町・総曲輪地区市街地再開発事業に伴う近世富山城下町発掘調査概要—

2005(平成17)年2月28日発行

発行 富山市教育委員会

編集 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒930-0803

Tel 076-442-4246

Fax 076-442-5810

E-mail:maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印刷 越浜印刷株式会社

〒939-8214

富山市黒崎625

Tel 076-425-0283

Fax 076-429-5377

